2012 年春休み友情のレポーター　フィリピン取材レポート

吉川 拓樹（三重県／当時 12 歳）

ぼくは、友情のレポーターの吉川拓樹です。ぼくたちが向かったのは、フィリピンの首都マニラです。フィリピンは、7000 個程の島から出来ています。不安と好奇心でいっぱいでした。

25 日

成田から飛行機に乗りフィリピンにつきました。すごく暑くて汗がどっと出てきました。交通事情が整ってなかったのでおどろきました。車の荷物を置くところに人が乗ったり、車がこわれているのにそのまま走り続けている人も見ました。まだ道路はコンクリートで車線が引いていない部分もあります。事故しそうでこわかったです。

また、貧富の差もありました。大きなビルやきれいな家もありますが、簡単に出来ていてすぐこわれそうな家もあります。どうして格差がうまれるのだろうと不思議でした。

ぼくたちは、若者の家という自立しえん施設に向かいました。たくさんの子どもが共同で生活しています。彼らは職業につくために訓練をするそうです。子どもが子どもらしく遊ぶ遊び場としても利用されているそうです。若者の家についたら歓迎パーティーを開いてくれました。ダンスや歌、詩の朗読をひろうしてくれました。また、ぼくたちからは、タガログ語で自己紹介と日本の様子、日本とフィリピンの関係などを伝えました。

みんなと楽しくすごせたのでよかったです。

26 日

今日は、若者の家に行って職業訓練の様子を取材しました。さいほうを練習していました。足こぎミシンでぬっている２人の人に取材しました。練習している人の中には、親に捨てられて若者の家にきた人もいます。その人は、親に会いたいそうです。すごくおどろきました。彼が親に対して持っている感情は不思議だと思いました。もしぼくが親に捨てられたら、顔も見たくないからです。一生うらむと思います。

27 日

今日は、パヤタス地区にあるゴミ山へ行きました。生ゴミのにおいがしてくさかったです。ゴミ山は以前、なだれが起きて 200 名程の人が亡くなりました。また、メタンガスが出て爆発が起きたそうです。なので今は、なだれや爆発が起きないように整備されているそうです。

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

ゴミ山では、たくさんの人が大きなふくろを持ってゴミを拾っていました。ブルドーザーがひんぱんに動いていて危ない仕事でした。ぼくは、こんな危ない仕事を絶対にしたくないと思いました。

ゴミ山から降りると子どもがゴミを積んだトラックに乗り、ゴミを集めて降りる作業をしていました。15 才未満は、ゴミ山に入ってはいけないそうです。ぼくより小さい子もトラックに乗っていました。子どもが働くことは、危険なので絶対にいけないと思いました。ぼくは働かなくても学校に行けます。でも彼らは危険な仕事をしています。学校に行っているかも分かりません。産まれる場所がちがえばこんな貧富の差があるなんていうのは絶対だめだと思います。

28 日

今日は、バゴンシーランに住むメーアンとジョシュアに家庭訪問をさせてもらいました。バゴンシーランは、2009 年の大雨でひ害を受けました。

メーアンは、あまりひ害を受けていないそうですが、ジョシュアはかなりひ害を受けたそうです。川の近くに住んでいて大雨で家がのみこまれたそうです。川から 10m 以上高い場所に家があったのですが、高台から思い出がつまった家がのみこまれるのを見ていたそうです。みんなとバスケットボールをして遊んでいたジョシュアがこんなにつらい思いをしていたなんて知りませんでした。また、樹希ちゃんの津波の経験も聞くことが出来ました。ぼくは、水害を体験したことがありません。話しを聞いて、水害のこわさと、つらいことがあってもがんばって生きていくことの大切さを学びました。

29 日

今日は、マージェリンちゃんの家に行って取材させてもらいました。親は、店を経営していてお手伝いをしているそうです。トラックがひんぱんに行き来していてとても危なかったです。幸せとは何だと思いますか、と聞いたら「家族といること」と答えました。ぼくは、親にさんざんなことを言ってきたけど、それはとんだ親不孝だと思いました。だから、家に帰ったら親に親不孝していてごめんなさいとあやまりました。

夜、路上で生活している家族を取材しました。大人から小さな子どもまで、路上でねとまりしているそうです。笑顔がかがやいていました。顔にどろがついていたのでとってあげようとしたけど、くっついていてとれませんでした。ラグビーというシンナーも使っているそうです。ゴミを拾って売ったり、物ごいをして生きているけれども、すごくやさしい人たちでした。樹希ちゃんが泣いていた時に泣かないで、と言ったり、スタッフが買ってきて配ったパンをくれたりしました。元気でやさしくてかわいくて何よりも明るい子どもたちを見ていると悲しいような言葉で表現できない感情をもちました。彼らは今、何をしているのだろう。

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

30 日

今日は、今まで取材した子とイントラムロスのサン・オウガスチン教会に行きました。イントラムロスは、世界遺産の一つです。ぼくは、世界遺産が好きです。教会に行くのは初めてでとてもワクワクしました。マリアの像や大きなつぼなども展示されていました。みんなと一緒だったので楽しかったです。フィリピンの人は 90%以上がキリスト教の信者で、メーアンはよく近くの教会に行っているそうです。いい思い出が出来てよかったです。

31 日

今日は、これまでに取材した子と若者の家に住む子と、バタンガスのビーチに行きました。海はきれいで興奮しました。さっそく泳ぎました。水害を受けたジョシュアと樹希ちゃんも元気に泳いでいたのでよかったです。みんなゴーグルをかしてと言ったのでみんなで使いました。泳げない子も教えたら泳げるようになってすごくうれしかったです。

夜、職業訓練で使った服をいただきました。一生の宝物です。

みんなといっしょにねました。すぐねてしまいました。

1 日

みんな早起きで 6 時には泳いでいたそうです。ぼくも朝ご飯を食べてから泳ぎました。

そのあと若者の家に住むジェフ、レジ、ジャンポールに取材しました。彼らは、育児ほうきされて KnK の家にきたそうです。母に対して、いかりを感じているそうです。でも会って話がしたいと言っていたのが心に残っています。

彼らの夢は、KnK のような団体を作ったり、兵隊や医者になり人を助けることだそうです。若者の家にくる前は、1 日 1 食で、食べない日もあったそうです。そのため、あまり成長していなく 16 才で 140cm 程でした。びっくりしました。KnK の大切さと、今もおなかをすかしている子がたくさんいることを知りました。インタビューに答えている時、悲しそうな顔をしていたのが印象的でした。

帰りのバスの中で、ばくすいしてしまいました。そしてみんなと別れの時がきました。

「また、くるから」

と言って別れました。なみだがあふれてきました。みんなを乗せたバスが小さくなり、見えなくなりました。

2 日

フィリピンの KnK スタッフと別れて空港に行きました。

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

飛行機に乗ってかっそう路につきました。どんどんスピードが上がってきました。心の中でさようならフィリピンの人たち、さようならフィリピン、さようならとさけび、飛びたちました。

ぼくは、９日間フィリピンにいって、いかに自分たちがめぐまれているかを知ることが出来ました。くる前は、貧しい生活をしている人が、外国にいることは知っていましたが、ぼくは何も知りませんでした。外国だから関係ないと思っていました。フィリピンに行って、子どもがつらい思いをしている、路上で生活している、子どもが働いているのを目の当たりにして、悲しい思いをしているけどがんばって生きているのを知りました。もし、ぼくがフィリピンに産まれて働かされたら絶対にいやです。だから他人事で済ますのでなく同じ人間として、その子たちを助けなくてはならないと思います。ぼくは、フィリピンで学んだことを一生大切にしたいです。彼らは、常にぼくたちを必要としているので、それに応えなければならないと思います。

ぼくが出来ることは、フィリピンの現状を１人でも多くの人に伝え、支援の輪を広げていくことだと思っています。そして、子どもが働いたり、悲しい思いをする現状をなくしていきたいです。

2012 年春休み友情のレポーター　吉川 拓樹

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

2012 年春休み友情のレポーター　フィリピン取材レポート

菅野 樹希（岩手県／当時 15 歳）

3/25 から 4/2 までの約 10 日間、私は友情のレポーターとしてフィリピンの首都圏であるケソン市や KnK の活動地、カラオカン・ノース市で現地の子どもたちを取材してきました。

私が KnK とこの活動を知ったのは震災後、KnK のモバイルバスを利用し、そこでの紹介がきっかけでした。

フィリピンと聞いた時は、南国の国というイメージが強かったのですが、発展途上国と聞いたとき、被災地と似たところがあるように感じました。恵まれない環境の中でフィリピンの子どもたちはどんな生活をしているのだろう。そこがすごく気になりました。そして、少しでも日本の私たちのことを伝えたかった。だから、レポーターに選出されたという電話を受けた時はすごく嬉しかったです。

しかし、ダメもとでもあったため、正直出発まで事実を受け入れられずにいました。まだ夢だと思っていましたが、成田のホテルに泊まり、いよいよ明日私は日本にいないと考えるとすごく緊張しました。

そして出発の日、初めて飛行機を目の当たりにして、乗って改めてその時、「これは夢じゃないんだな」と思いました。すごく緊張してきて、すごくワクワクしてきました。どんな出会いが待っているのか、楽しみで仕方なかったです。

フィリピンに到着し、空港を出ると、やはりすごく蒸し暑くて、すべてのものがあせばんでいるような感じがしました。じめじめとして、甘ったるいようなにおいがどこからともなく漂っていたのを覚えています。当たり前なようですが、日本語を話しているのは私たち以外におらず、周りを見渡しても言葉の通じぬ人ばかり。そこでますます緊張と不安がこみ上げてきました。頑張って覚えて練習したタガログ語のあいさつがふっとんでしまいそうでした。

車から見た市街地の風景は驚きの連続でした。広い道路をたくさんの車が車間も十分にあけずに走り、そのせまい車との間を人やバイクや自転車が行来する。ほったて小屋のような家が多く建ち並び、その前の歩道にパラソルやテントをはって露店を出している人、ガリガリの犬、その貧しい風景のすぐ横に建つ立派なビルや派手な看板。それだけで格差の大きさがなんとなく伝わってきました。ところせましとひしめきあう建物や人々を見て、「ここに津波がきたら・・・」と私は考えてしまいました。

若者の家へ到着。それまでの第一印象は、元ギャングの子やストリートにいた子が

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

いると聞いていたため荒れているイメージがあり、かなり緊張していました。そしていよいよ私たちの歓迎会。若者の家の子たちはバンド演奏やダンスを披露してくれました。その姿は明るく私たちの不安とは真逆なものでした。「しらけるのでは・・」と心配をしていた私の日本紹介での津波の発表にもみんな真剣な態度で聴いてくれて、すごく嬉しかったです。一緒にご飯を食べたりする中で、子どもたちと打ち解けることができて、すごく楽しい時間でした。

ホテルへの帰り道のガソリンスタンドでお花を売っている女の子とそのお母さんを見つけました。私の弟と同じ、小学校三年の女の子でした。話によると、普段は学校へ通い、学校の無い夜にこうしてお金をかせいでいるそうです。お花は１つ10ペソ、日本円にして役20円。彼女のもうけはいくらなのでしょうか。そんな少ない収入のために、小学校３年の女の子が労働を強いられていると考えるといたたまれなくなりました。

２日目。若者の家で行われている職業訓練の様子をインタビューさせてもらいました。

まず見せてもらったのが、小さなガラス細工。ピアスやブレスレットなどすごく丁寧に作られていて、訓練で作られたとは思えないクオリティでした。また、縫製品のエプロンやはぎれでつくったマットなど。見本を見て作ったとはいえ、手作りとは思えない完成度のものばかりでした。

そしてインタビューへ。若者の家で行われている縫制の訓練をしている方、何人かにお話しを聞きました。その中に一人だけ男の子がいました。19歳の彼、フレデリック君はハーモニーというルームシェアのような施設から若者の家に通い、訓練を受けている元若者の家の子だそうです。長い間若者の家にいたため、母親にはもう３年も会っていないのだそう。それなのに、母親に会えるとしたら「会いたい」と答えられる彼はすごく優しい人なんだなぁと思いました。

彼がいつか良い形でお母さんと再会できますように。

インタビューの後は、子どもたちと遊びました。日本の人生ゲームに似たモノポリで遊んだり、ちょっとしたレクをしたり。その中で、私と拓樹君はロナード君という15歳の男の子に彼が描いてくれた絵をもらいました。似顔絵もあって、すごく嬉しかったです。お礼に私も何枚か描きましたが、彼のように純粋さのある絵は描けないなと思いました。

３日目。私はあんなに無邪気にふるまう子どもたちの真実を見ることとなりました。

その日の午前は、１ペソキャンペーンに協力してくれた公立学校へ。ちょうど卒業式の日だったらしく、1000人を超える生徒さんが集まっていました。そんな大勢の前で津波の紹介やお礼のあいさつをした後、生徒代表の男の子と女の子がそれぞれ歌を披露してくれました。私も拓樹君もそれぞれ手をつないで歌ってもらい、目まで見

©国境なき子どもたち／2012年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

つめられて歌われたので、かなり照れくさかったです。
　その後インタビューをさせてもらうカーラちゃんとジョベル君と一緒にパヤタスのゴミ山へ。道路で降りた時からすごいにおいで、思わず鼻をふさぎたくなりました。色々な説明を受け、いよいよ車で山の上へ。一番上にあるMRFは分別できないごみをうめるための場所で、そこで沢山の大人がゴミの中から使えそうなものを取り出したり、ジャンクショップへ売りに行っていました。子どもの姿はそこにはありませんでした。登録制だそうです。ゴミ山では、トラックが人のいる、いない関係なしに動き回ります。大人もトラックをよけながらひたすらゴミをあさっています。見るからに危険な状況でした。
　今は以前より整備されている状態だとはいいますが、まだMRFに子どもが入ることができた時に、ごみを拾いにきた子どもがトラックにひかれてなくなってしまったそうです。また、ゴミ山のゴミのなだれがおき、ふもとに住んでいた大勢の人の命が奪われるという事故がおきたそうです。ごみの中で命を終える子どもたち。それはいったいどんな気持ちなのか。それを考えるとすごく辛くて涙が出ました。

　ファーストフード店でお昼をすませ、いよいよカーラちゃんのお家へ。「ここよ」のジェスチャーで止まったお家の前で言葉を失いました。率直に「これが　“家”か」と。驚がくしました。彼女の家におじゃまするのを少しでもためらった自分に今でも罪悪を感じています。
　インタビューを始めると彼女はあまり乗り気ではない様子で、途中から彼女のお母さんが答えてくださったり、お家を案内してくれました。トイレは他の家と共同、お風呂は歩いて2～3分のところにある共戸ですまし、外にあるキッチンにはカーラちゃんの兄弟が一人寝ている状況。酷かった。日本では考えられないものすぎて。いつもかわいらしい笑顔の彼女からは考えつかない環境に彼女は生きているのだと、強く心をうたれました。
　次にジョベル君のお家へ。彼の家のすぐうしろには、あのゴミ山がそびえたっていました。その下をごみであふれた下水の川が流れており、そんな不衛生な環境で彼は毎日生活していました。しかし私が驚いたのは彼のインタビューの答えでした。彼の答えは私の考える「子ども」の答えではありませんでした。
　もしお金があったら？お母さんにあげる。
　夢は？　軍隊に入り、まずしい人や困っている人を助ける。
わざと言っている様子ではありませんでした。それが辛かった。
ごみを拾い、わずかなお金にかえ、まずしい生活をしている彼は自分のことよりも家族を大切にしているようでした。自分がゴミ山に行ってゴミを拾いお金にしないと家族が生活できないという彼の答えに彼の細い肩にはたくさんの重みがのしかかっているのだなと思いました。

©国境なき子どもたち／2012年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

4 日目。バゴンシーランとう地区に住む 2 人の子どもを取材しました。
まず若者の家でアグネスさんにバゴンシーランの説明をうけました。
バゴンシーランとは、どんなところなんだろう。そんな私がうけたのは、「金を出せ」とおどされた時の対処法でした。そんなところに無邪気でかわいい子どもたちが暮らしているのです。

初めにメーアンという女の子のお家におうかがいし、インタビューをしました。彼女のお家は川の近くの急な斜面にツリーハウスのような形で建てられていました。彼女のお父さんとお母さんが何年か前にここへ引っ越した時に建てたそうです。しかし、彼女に家族構成を聞くと、お母さんはいませんでした。亡くなられたそうでした。
2009 年にフィリピンをおそった洪水。彼女の家も家族も間一髪難を逃れましたが、もともと身体が弱っていた彼女のお母さんは洪水のショックで心も弱ってしまい、亡くなってしまったのだそうです。間接的とはいえ、水害によって奪われた命。私はあの恐ろしい津波を思い出しました。
メーアンちゃんのお父さんはタクシードライバー。安定しない収入に対し、長い労働時間で家に帰れない日もあるそうです。お母さんにも、お父さんにも十分に甘えることのできない彼女。幼い彼女が兄弟といる時は、しっかりした女性に見えました。メーアンちゃんが私と仲良くしてくれて彼女の中で少しでもあまえてくれたいたというのなら、私は幸せに思います。

次にジョシュア君のお家へ。彼のインタビューの中で私はすごく貴重な体験をしました。
ジョシュア君のお家は川沿いにあり、2009 年の洪水では家が流されてしまったそうです。やはりよぎったのは恐ろしい津波の光景。
なすすべもなく立ち尽くしたあの瞬間。彼もまた体験者でした。大切なものが飲み込まれ、流されていく。いつもの風景が変わりはてていく様子。当時 9 歳の彼は何を思ってそれを見ていたのでしょう。感じた辛さ、恐怖、絶望が彼の答える様子から伝わってきました。昨日の今日出会っただけの私たちはジョシュア君の心の傷をえぐるような質問をくり返しました。だけど彼は答えてくれた。私だったらされたくないような質問なのに。そんな質問に一生懸命答えてくれる彼の眼のふちが赤くなっているのを見て、たまらず私が泣き出してしまいました。辛いのはあなたの方なのに。ごめんね、怖かったよね、不安だったよね。
彼は最後までインタビューを続けてくれました。私よりはるかに小さい彼は、私よりはるかに強かったのです。
インタビューを終え、彼にお礼をして顔を上げると現地スタッフやジョシュア君のお母さんやおばあちゃん、みんなが泣いてくれていました。今までに誰に対しても感じることのきなかった感覚を彼とのインタビューの中で生み出すことができたので

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

す。
　少しそれますが、フィリピンの子はみんなすごく強い。メンタルや意志が強い。屈強すぎる。私からしたら本当にみんな強い子たちに感じます。というのは客観論で、実際は気持ちを吐き出したくても、周りの子がみんな耐えているから吐き出せないのかなと。「弱い部分」を理解して、受け止めてほしいのかもしれません。なぜなら私もそうであったからです。だからあの時ジョシュア君の気持ちも受け止められる限りを受け止めたかった。ジョシュア君の体験したことを一番心から理解することができたのは、そこにいた人の中で私だけではないかとは思うけれど。でもそれだけで、子どもたちとまた違う目線でふれあうことができそうだと思いました。

　５日目。バワンタクック地区に住むマージェリンちゃんとジェフ君のお家でインタビューです。その日は、ジェフ君の学校は卒業式のため、マージェリンちゃんのお家のみの取材となりました。
　マージェリンちゃんは私と同じ１５歳の女の子。でもどこか大人びていてお姉さんっぽい子でした。そんなマージェリンのお家は小さな露店でした。目の前の道路はとても交通量が多く、横の空き地には土砂をつんだ大型トラックがひっきりなしに出入りし、とても危険な状況でした。
　彼女のお家が経営する小さな露店は、その大型トラックで働いている人を中心に、コーヒーやお菓子を売っています。彼女もそのお手伝いをします。彼女の兄弟も嫌がることなくお手伝いをするそうです。毎日危険にさらされ、大人から嫌がらせを受けることもあるそうです。でも、彼女にとってお手伝いは苦ではないのです。楽しいのです。家族と共にいれることが幸せで、お手伝いは楽しくて・・。私が知るマージェリンちゃんの答えとしてはすごく意外でした。そして、同い年の彼女が、こんなにも家のことを大切にし、家族や親のことを大事に思っているのを見て、自分をかえりみました。家のことは手伝わず、親や家族に反抗していた自分・・。馬鹿みたいでした。唯一無二の一緒にいるだけで心の満たされる「家族」に私は今まで何てことをしていたのかと。
泣きながら後悔して、拓樹君もそうだったようで、帰国したら２人とも家族に謝ることにしました。

　インタビューの後、若者の家で職業訓練生の卒業式に出席させてもらいました。
　会場である部屋に入ると、縫製コースの席にはあのフレデリック君の姿がありました。先生から卒業証書を受け取った彼は以前よりもりりしく感じました。
　今若者の家にいる子どもたちのように、フレデリックくんもまた子どもだった。それが今、自分の生活を自分で支えられる程たくましく成長している。そう考えると、彼や他の卒業生の未来も、子どもたちの未来も、全力で応援したくなりました。本当におめでとう。

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

卒業式を終え、いよいよストリートチルドレンの子に会うことになりました。場所はSMフェアビューという大型ショッピングモール前のバスターミナル。人も交通量も特に多かったです。

車を降り、道路をわたった私たちに「ハロー！ジャパニーズ！Knk！」と明るくかけよってきた子どもたち。彼らの姿にいっきに胸がしめつけられました。髪がボサボサで、肌の色は黒ずんだ、3～4歳の子と、12～13歳くらいの子たちでした。服はそまつな物で、小さな子はぶかぶかのTシャツ等を上に一枚かぶっているだけでした。

きらきらした瞳、好奇心いっぱいに私と遊ぼうとじゃれてくる人なつっこい子どもたち。その横を彼らを気にもとめず行来する車の群れ。

涙が出ました。頭の中はぐちゃぐちゃでした。意味がわからなかった。なぜ、どうして、この子たちはここにいて良いはずがないのに。おかしい、おかしい、おかしい。私にはどうすることもできない。涙が止まらなかった。子どもたちは「どうして泣いているの」といった様子で私をのぞきこみます。「泣かないで」と言ってくれる子もいました。泣きとめるはずがないよ。君たちのような状況にある子を目の前にして。必死に涙をぬぐい、彼らに少しでもふれ合おうと、一番小さな4歳の女の子、エリカちゃんをだっこしました。
4歳の子はあんなに軽かったでしょうか。あんなに小さかったでしょうか。私の3歳のいとこよりもずっと軽い気がしました。

スタッフさんが買ってきてくれた、パンとジュースを食べた後、アデリーンという私と同じくらいの女の子にインタビューをしました。

彼女はTシャツを頭にかぶり、首の穴のところに顔を出すなんともおかしな恰好でした。アデリーンちゃんは以前、きれいで長い髪型でしたが、ノミなどの影響で、短くなってしまい、それを隠すためなのだそうです。

彼女たちのお風呂は車の洗車場、寝床はかたいアスファルト、ごみ拾いとものごいで生活し、病気やけがをしたら、KnK のような支援団体が無い限りはただ涙を流すことしかできない。
彼女の口から平然と発せられる答えに思わず耳をふさぎたくなりました。また涙が止まらなくなりました。インタビューの最中に一人でうずくまって泣いてしまいたい、彼女にはものすごく失礼なことをしました。

まさに命がけの生活。生きるために命ががけになる。と、そう考えて1日1日を生きている人は日本にはどれくらいいるのでしょうか。彼女たちが路上で生活するのには、わけがありました。彼女の妹2人が行方不明になっているのです。いつか2人が戻ってくるかもしれない、だからバスストップからはなれるわけにはいかない。

そう答えるアデリーンちゃんの目は、うるんでいるようでしたが、まっすぐな瞳から何か強いものを感じました。

©国境なき子どもたち／2012年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

絶対に忘れない。この日のことは絶対に。私たちと同じ「子ども」の姿であることを絶対に忘れてはならない。そう思いました。

６日目には、子どもたちと世界遺産であるイントラムロスサン・オウガスチン教会を見学し、いよいよ７日目若者の家の子どもたちとバタンガスのビーチまで遠足です。
行きのバスからみんな大はしゃぎ。歌ったり、DVD を見たりしながら南にあるバタンガスへ。到着してからは我先にと海へ！
とてもきれいで澄み切った海は、震災前の私の町の浜をほうふつとさせ、少し切なくなりました。泳ぎに泳いで夕食を食べた後は、グループに分かれて出しもの大会です。私は女の子グループで簡単なダンスを披露しました。どのグループのも大盛り上がりで、すごく楽しいパーティーでした。会の最後は KnK ジャパンに感謝状をいただき、照れくさかったけど、とても嬉しかったです。
夜は女の子グループのみんなと一緒に寝ました。

遠足２日目。朝の６時過ぎから子どもたちは泳ぎだします。
さすがに私はできませんでしたが、朝に見る海もなつかしいものを感じました。
朝食を食べ、少し泳いだ後、また子どもたちに取材をしました。
若者の家に住んでいる３兄弟、レジ、ジェイ、ジャン・ポールです。
話によると、若者の家に住むことになったきっかけは親の育児放棄だそうです。その裏には、家庭内の複雑ないざこざがありました。
親がつれてきた連れ子たち。自分たちに注がれなくなった愛情。そんな親への憤り・・。今まで取材してきた子たちは、親と家族といれることが幸せだと答えていたのに。貧しさだけでない子どもたちを苦しめる現実に改めて驚がくしました。それでも、自分たちを生んだ実の親に代わりないから会いたいと答えられる ３ 人にすごく胸をうたれました。
マージェリンちゃんや、他の子の時もそうだったけれど、やっぱり家族は大切で、その家族と一緒にいれることはやっぱり幸せなことなんだと、改めて思いました。

バタンガスビーチに別れを告げ、いよいよ子どもたちとも最後の別れの時となりました。やっぱりすごく辛かった。少しの間ではあったけれど、その中で仲良くしてくれたみんなと本当に離れたくありませんでした。本当に最後なんだなと思うとすごい泣けてきて、みんなに “Don’t cry!” と言われても、涙は止まりませんでした。
最後に何人かがお別れのハグをしてくれました。私があの日、抱きしめた小さな体の感触を仲間の一員としてむかえてくれた子どもたちみんなのことをずっと忘れないと誓いました。

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

私にはフィリピンで友情のレポーターの活動をするにあったっての目標がありました。まず、日本のことや私たちのことを知ってもらうこと、フィリピンの子どもたちのことをよく知ること。そして、子どもたちの何らかの支えになってあげること。私は達成できていたでしょうか。

日本のことは、がんばって伝えて少なからず伝わったはず。でなければ、ジョシュア君とのインタビューで涙されることはなかったと思います。

フィリピンから帰ってきて振り返ると、やはり子どもたちのことを良く知れていなかったなと思います。でも、本やネットの文章では知ることのできないフィリピンを味わったこともまた事実です。

私たちの出会うきっかけは災害でした。もしも私に震災がなかったら、きっとKnKの活動を知ることもなかった。沢山の人に出会うこともなかった。私がフィリピンを自分自身の視点で感じることはなかった。フィリピンで起きた洪水だって、きっと他人事だったでしょう。

津波や災害を良く言うつもりはありません。あれは、大切なものを沢山のみこんでいきました。でも、本当に失っただけでしょうか。津波がきたからこそ、私たちが改めて得るものもあったのではないでしょうか。そのことをフィリピンに行って、色々な人に出会って、ますます強く感じることができました。

私は、フィリピンの子どもたちと痛みを分かち合えたと思います。彼らの全てを知らずとも、インタビューで彼らの話してくれた事実は私の胸に刺さるものばかりでした。私が伝えたかった震災のこと。心配してくれていないならば、1ペソキャンペーンに協力なんてしないはずです。彼らは私たちのことをどう思ったでしょうか。

もしかすると、私が思った以上に子どもたちとは心でつながることができていたかもしれません。

マイナスである津波と洪水がもたらしたプラスの出会い。

私はもう辛くありません。彼らに伝えることができたから。彼らの辛さは、私にわけてもらったから。国境に関係なく、お互いを理解し、支え合うことのできる存在を見つけることが出来たから。

辛くても前に進まなければいけない。辛かったからこそ、苦しかったからこそ、話さなければいけない、伝えていかなければならない。
それはこれからも避けては通れないと思います。

私は伝えたい。私たちの出会い、子どもたちの様子、それを取り巻く環境。どれも私が感じたこと。

あの時感じた「伝わる感覚」ではないかもしれません。それでもいい。少しだけでもいい。覚えておいてほしい。気持ちを伝えることに、それが伝えることに、国境はないのです。言葉の壁があろうとも、伝えようとする心、受け止めようとする心で、

©国境なき子どもたち／2012年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】

どんな人にも思いは伝えられるのです。

　それを伝えていくことが、国境なき友情で結ばれたフィリピンのみんなへの、１つの恩返しになると、私は信じています。

2012 年 春休み友情のレポーター　菅野樹希

©国境なき子どもたち／2012 年 春休み友情のレポーター【禁無断複製・転載】